京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（3 年計画の 2 年目）

1. 研究課題

20 世紀中国史の資料的復元

Reviving the History of Twentieth-Century China by Reviewing the Source Materials

2. 研究代表者氏名

石川禎浩

ISHIKAWA Yoshihiro

3. 研究期間

2019 年 4 月-2022 年 3 月(2 年目)

4. 研究目的

中国における近現代史の叙述は、領域によって程度の差はあるものの、イデオロギー型革命政党によって統制され、方向付けられてきた。かれらは党派ごとに自己中心的、あるいは独善的解釈による歴史像を持つだけでなく、そうした歴史像を支えるべく、歴史資料の収集やその編纂、刊行にも力を入れてきた。ただし、そのさいに資料はしばしばその歴史像に符合するよう編纂（改竄を含む）されてきたため、政治史にせよ、思想史にせよ、あるいは文学史にせよ、既存の公刊史料に基づく限り、研究者はどうしてもその枠組みから脱却できないという隘路に行き着いてしまう。それゆえ、近代の中国がどのようなものであったのかを知るためには、まず基本的な史料を編纂状態以前にもどすという気の遠くなる作業から始めなければならない。本研究班は、20 世紀の中国の政治、運動、文学、芸術といった領域で、それぞれ根本資料と見なされてきた基本文献に関して、その生成や編纂、刊行の経過を洗い直したうえで本来の姿にもどし、それによって中国 20 世紀史全般を復元し、再構築することを目指す。

The history of 20th century China, whether good or bad, has been written under the dictates of the political parties which have an ideological mindset of the revolutionary. They not only had their own self-centered narratives of the modern history, but also collected and compiled historical materials concerned to reinforce their narratives. The problem is, however, that they often made the falsifications when they edited those source materials into the official documents. Because of this, we should understand how their narratives were formed along with the compilation of the historical materials in the century. In this research

seminar, we shall investigate and restore various source documents which has been considered to be the basic materials in each area of modern China, such as politics, revolutionary movement, literature, art and so on. This type of research, which makes full use of original sources scattered around the world to revive the primary documents of twentieth-century China, would open the way for us to have a refreshing understanding of how the modern Chinese history really was.

5. 本年度の研究実施状況

隔週金曜午後に研究班例会を開催することを中心に活動を進めた。班員は30数名、毎回の研究班例会の出席者は20名程度であった。新型コロナウィルスの感染拡大のため、オンラインあるいはハイブリッド方式による開催となったが、幸い平常時と同様の規模・質を維持することができた。特にオンライン開催であることをいかして、東京で活躍する複数の研究者による積極的な参加を得られたのは収穫であった。12月末時点で開催した例会は12回を数え、毎回事前にレジュメを班員に配布し、またコメンテーターをつけて、専門的見地から議論を深められるよう工夫した。研究班では、まず報告者が1時間半程度の報告を行ったあと、コメンテーターが30分程度の批評を加え、その上で全体討論を実施するという形式を取った。報告用レジュメを事前に班員に配布していることもあり、議論が活発に行われた。また、複数の外国人研究者・院生（主として中華人民共和国出身）が継続的に参加していることも本研究班の特色であり、彼らとの討論を通じて、中国の近現代史関連の基本的な文献や資料集の成り立ちについての理解をいっそう深めることができた。資料的復元として、注目すべき研究・対象としては、内山完造『花甲録』や、農村部における工作の状況を伝える『喬欽起工作筆記』などが俎上にあげられ、それらを資料として扱う場合の問題点や注目点が提示された。また、中国共産党史にかかわる「若干の歴史問題に関する決議」や「国家構成員」概念など、従来の研究蓄積の前提を問い直す試みも行われた。さらに、前身の研究班の成果である『毛沢東に関する人文学的研究』について2度の合評会を開催、8名の評者によるコメントを得て、中国現代史研究の蓄積の継承・深化の道筋を探った。

6.本年度の研究実施内容

2020-05-08 毛沢東時代の読書規範――伝統からの離脱と回帰　発表者 比護遥 教育学研究科　コメンテーター 水羽信男 広島大学

2020-05-22 20世紀中国の政治・思想史研究を発展させるための出版政策史研究――『中華人民共和国出版史料』の活用　発表者 中村元哉 東京大学　コメンテーター 瀬戸宏 摂南大学

2020-06-05 『毛沢東に関する人文学的研究』合評会（1）　毛沢東と胡適 発表者 森川裕貫 関西学院大学 毛沢東と巨大水利建築――1950年代の官庁ダムと十三陵ダムを中心に 発表者 島田 美和 慶応義塾大学

2020-06-19 『毛沢東に関する人文学的研究』合評会（2）　　政治家・芸術家：1940年代

の延安における全体主義芸術の確立 発表者 漆 麟 人文科学研究所 文化大革命と毛沢東の水泳 発表者 高嶋航 文学研究科 〃
2020-07-03 史料としての『花甲録』――特に戦時期の検証 発表者 金丸裕一 立命館大学 コメンテーター 谷雪妮 文学研究科
2020-07-17 『劉少奇派』とは何であったのか 発表者 谷川真一 神戸大学 コメンテーター 林礼釗 大阪大学
2020-10-02 『喬欽起工作筆記』から見る現代中国政治の転換 発表者 田中仁 大阪大学 コメンテーター 河野正 東京大学
2020-10-16 『台湾之農具』と帝国の視角 発表者 都留俊太郎 人文科学研究所 コメンテーター 菊地暁 人文科学研究所
2020-10-30 中国共産党が使用する国家構成員の概念についての歴史的検討 発表者 和田英男 大阪大学 コメンテーター 谷川真一 神戸大学
2020-11-13 上海市檔案館所蔵史料から考えるある「民族資産階級」の軌跡（1949-1965） 発表者 水羽信男 広島大学 コメンテーター 江田憲治 人間・環境学研究科
2020-11-27 橘樸の人物像の再構成：大正知識人、民族誌家、社会民主主義者 発表者 谷雪妮 文学研究科 コメンテーター 福家崇洋 人文科学研究所
2020-12-11 “若干の歴史問題に関する決議”に関する若干の考察 発表者 石川禎浩 人文科学研究所 コメンテーター 小野寺史郎 埼玉大学
2021-01-15 中華人民共和国成立初期の復員軍人と栄誉軍人模範――「栄軍旗幟」張樹義の物語と基層革命関係者集団 発表者 丸田孝志 広島大学 コメンテーター 森川裕貫 関西学院大学 〃
2021-01-29 林彪派将軍回想録の資料価値：邱会作回憶録を中心に 発表者 瀬戸宏 摂南大学 コメンテーター 鄭成 早稲田大学
2021-02-12 日独合作映画『新しき土』の中国上映騒動について ：民国外交部档案を手がかりに 発表者 楊韜 仏教大学 コメンテーター 韓燕麗 東京大学
2021-02-26 中華人民共和国初期における肺結核医学資料の編纂 と出版（1949-1957） 発表者 瞿艶丹 人文科学研究所 コメンテーター 飯島渉 青山学院大学
2021-03-12 ふたたび、「路線」について 発表者 江田憲治 人間・環境学研究科 コメンテーター 李ハンキョル 文学研究科

7. 共同研究会に関連した公表実績
なし

8. 研究班員
所内
岩井茂樹、村上衛、福家崇洋、漆麟、王剛、郭まいか

学内

江田憲治（人間・環境学研究科）、瞿艶丹（文学研究科）、谷雪妮（文学研究科）、高嶋航（文学研究科）、太田出（人間・環境学研究科）、比護遙（教育学研究科）、貴志俊彦（東南アジア地域研究研究所）、李ハンキョル（文学研究科）、秋田朝美（経済学研究科）

学外

韓燕麗（東京大学）、菊池一隆（愛知学院大学）、島田美和（慶應義塾大学）、鄒燦（大阪大学）、瀬戸宏(摂南大名誉教授)、瀬辺啓子（佛教大学）、田中仁（大阪大学）、谷川真一（神戸大学）、団陽子（神戸大学）、都留俊太郎（同志社大）、土肥歩（同志社大）、中村元哉（東京大学）、丸田孝志（広島大学）、三田剛史（明治大学）、水羽信男（広島大学）、宮内肇（立命館大学）、森川裕貫（関西学院大学）、山崎岳（奈良大学）、楊韜（佛教大学）、林礼釗（大阪大学）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	外国人	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
学内（法人内）	5	16	4	4	4	2	105	44	55	46	15
		(6)	(4)	(4)	(2)	(2)	(39)	(39)	(39)	(25)	(4)
国立大学	9	17	1	3	2	2	87	27	38	17	7
		(4)	(1)	(2)	(1)	(1)	(18)	(14)	(17)	(7)	(3)
公立大学	1	1					1				
		(1)					(1)				
私立大学	8	9		2			22		11		
		(1)		(1)			(2)		(2)		
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関	1	1					1				
その他		5					18				
		(2)					(2)				
計	24	49	5	9	6	4	234	71	104	63	22
		(14)	(5)	(7)	(3)	(3)	(62)	(53)	(58)	(32)	(7)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	7		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	1	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	8		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
東洋学報	1	2020 年 6 月	広西省における壬寅奇災とアメリカ救済遠征隊	土肥歩
「亡国の越境者」の 100 年	1	2020 年 10 月	越境者たちの神戸と「華僑」社会：「反攻」「解放」「独立」を巡るせめぎあい	岡野翔太
文化資源学	1	2020 年 6 月	日仏美術品交換の企図と挫折（1882-1885）：外務省記録から見る国際文化交流の事例として	比護遥
現代中国研究	1	2020 年 10 月	抗戦期中国の読書と動員：政治コミュニケーションから見る『読書生活』（1934-1936）	比護遥

20 世紀研究	1	2020 年 12 月	女性史の三通りの読み方	梁秋虹 著、都留俊太郎訳
駒込武編『生活綴方で編む「戦後史」』	1	2020 年 6 月	台湾語 王育徳における大衆と「チャンポン語」	都留俊太郎
飯島渉編『大国化する中国の歴史と向き合う』	1	2020 年 8 月	通史と歴史像	石川禎浩
転換期中国における社会経済制度	1	2021 年 2 月	寄付する人と使う貨幣――清代後期の貨幣使用と格差社会	村上衛
社会経済史学	1	2020 年 5 月	書評：豊岡康史・大橋厚子編『銀の流通と中国・東南アジア』	村上衛
歴史と経済	1	2020 年 10 月	書評：古田和子編著『都市から学ぶアジア経済史』	村上衛

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

本年度同様、隔週金曜午後に研究班例会を開催することを中心に活動を進める。新型コロナウィルスの感染拡大のため、オンラインあるいはハイブリッド方式による開催の見通しである。年度末に高質の音響設備の導入をはかり、平常時と同様の質の議論を維持できるよう努める。本年度までに班員による報告は一巡し、班員間で相互のテーマ・問題関心の共有が図られており、二巡目の報告となる今年度は、それぞれ研究の深化を目指して進める。また、オンラインであることを生かして東京から新たに研究班に参加することになった班員も報告を行うことが決まっている。中国現代史、とくに今日の学界で盛んに再検証が進められている 1950 年代の政治・文化面について議論を深めていく。コロナ禍のもとにあって、研究活動の維持には様々な困難が予想されるが、主にオンライン環境を積極的に生かしながら、従来以上に多様で充実した研究成果を得られるようにする。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本年度までに正規班員による研究報告がほぼ一巡し、班員の目指している研究テーマや問題意識がおおむね共有できたのを受け、二回目の報告を順にやってもらう。開催日は本年度同様の金曜午後とし隔週開催、予定では年間 16 回開催である。

本研究班はそのテーマの性質上、各地に散在する資料をその版本を含めて精査することが欠かせない。ただし、目下のコロナウィルスの感染拡大という状況の中、出張によって資料収集、発掘をするのが困難な状況が、今後もしばらくの間続くであろう。したがって、次年度の公表計画としては、オンライン中継を活用した定期例会を継続するとともに、本年度に実施したオンラインシンポジウム（講演会）に似た企画を策定することを考えている。